

新連載：オーストラリア便り vol.2

火災、変動、闘い

永田健雄（市民科学研究室会員）

キャンベラの住民は、記憶の限りでは昨年 11 月 22 日から既に 2 ヶ月以上森林火災の煙に苦しめられている。異常な高温と乾燥が続く中、消防隊員の尽力を以ってしても延焼し続ける地獄を間近にして、「火新世(1)」に突入したことを実感させられる。



キャンベラに襲い掛かろうとする森林火災の煙。2020 年 1 月 28 日 16:36 AEDT 撮影

森林火災と被害の日常化

森林火災の煙が街を覆うと、バーベキュー現場に出くわしたような焼いた臭いがし始める。この臭いをずっと嗅いでいると、煙の中にあっても臭いを感じなくなってくる。私が航空機でキャンベラに戻ったとき、キャンベラ空港着陸 10 分ほど前から、機内で煙が臭い出した。しかし、空港を出る頃には特に感じなくなっていた。街灯は、煙によるティンダル現象で明かりの道筋がよく見えていた。森林火災による煙が濃いと、日光が黄色くなったり、オレンジになったりする。空一面が黄色になることもあれば、地面に映った日差しがオレンジ色のこともある。外が黄色いのが当たり前になると、色覚が調整されて、黄色がだんだん白っぽく見えてくることはあるのだろうか。分からないが、そう疑問に思ったりもする。

今のキャンベラにいと煙の臭い、空の色、空気の質などに対する反応が鈍くなっていくように条件づけられているように覚える。このような脱感作と似て、災害が日常化することによる感覚の鈍化への懸念がある。キャンベラに住む人たちには、この災害という非日常に慣れきっている者がいるかもしれない。「これまでの生活と比べて不便にはなったけど、何だかんだ生きていくことができる」という感覚は、たくましいともいえるが、悪化する現状を肯定することになり、その蔓延は気候正義の実現を目指した大衆による共同行動から遠ざけるものとなりうると懸念する。

普段は、特段不自由を感じることもなかったり、不自由を覚えても「しょうがない」で納得させ続けてきたことがあると思う。私もそうだ。しかし現に、この社会様式が呈する種々の問題によって、一方的に負担を負わされている人たちがいる。満員電車でベビーカーや車椅子が乗せられない。食品の 1/3 を捨ててのに安全で十分な食にありつけない人が何億という。真夏の街中は、もうすでに人間が生きていけない環境になっている。税金を払っているのに、水道水の化学物質が心配で企業が用意した高いボトル飲料や浄水器を買わねばならない。キャンベラでは、喘息持ちの方が煙で苦しんでいる。こういった社会の状況が、誰かの生存権を脅かしている。明日は我が身かもしれない。

煙や高温は自然災害だが、その原因は明かに人為的な気候変動にある。この状況は窮極的には、資本を至上価値とし、大多数の犠牲の上で少数者が富むことを善とする世界観の上に現出していると思う。そこで現状を変えていくためには、ルールを書き換える必要がある。恐怖や罪悪感に苛まれたり、エコな生活を送らない友人を責めたりしている場合ではない。

むしろ、環境影響の大きな行動様式を取らせるインセンティブを与える現在の社会システムを問題の対象として、その変化のための社会運動が必要なのではないだろうか。この点についてニューヨーク・タイムズ誌に先月上がった意見記事(2)が参考になる。その記事では、私たちが気候変動と闘うための 5 つのステップが紹介された。エコな生活を送っていない自分や他者を責めない（エコじゃない生活を送ることを余儀なくさせられている側面もある）、システム（例：天然ガスのパイプライン）に着目し社会運動や投票行動等政治過程による法や規制の実行を希求する、社会運動に参画する（例：Thunberg の Fridays for Future や、地域の社会運動への参加）、運動における自分の貢献分野（情熱、スキル、財力等）を明確にする、よい未来像の実現をイメージし何のために闘っているかを知る。集約すれば以上のように述べていた。

この一方で、ライフスタイルの変革に意味が無いとも思わない。よりエコなライフスタイルを実践することにより、エネルギー消費や資源の無駄遣いの多い暮らしを送らせているシステムを自覚することができるし、闘う相手が明確化されることによって、社会運動を行なっていく上での自信にも繋がると思う。また、このような自覚や自信は、エコなライフスタイルの実践者と対話することによっても得られると思う。私の場合、キャンベラに来て市内や大学に飲料水を汲めるスタンドがあるため、ボトルで飲料水を買うことを辞めたことが飲料水の安全性や、前回の便りで述べた「水の正義」への意識に繋がったし、プラスチック包装を嫌い食生活に気を遣う同居人との会話を通して大量消費、市場利益最優先のシステムは変わらなければならないと強く思うようになった。

石炭と日本

話題は変わるが、オーストラリアでは「#StopAdani」という標語が流行している。近所でもこれをポストの前に掲げた家がある。現在、建設が進められているある炭田と関わるものだ。オーストラリア北東部のクイーンズランド州では、完成すればオーストラリア最大規模となる Carmichael 炭田建設のプロジェクトが進められている。そのプロジェクトの先頭に立つのがインドを拠点とする多国籍企業 Adani グループである。#StopAdani のホームページによれば、Carmichael 炭田が建設されれば、以下の害悪が及ぶとのことだ(3)。

- ・先住民族の同意なく彼らの土地や水源、文化を破壊する
- ・60 年もの間、グレート・バリア・リーフを石炭輸送の船舶が毎年追加で 500 隻通過
- ・クイーンズランド州の貴重な地下水 2700 億リットルが 60 年もの間タダで奪われる
- ・グレートアーテジアン盆地の帯水層を傷つけるおそれ
- ・大気中へ 46 億トンの二酸化炭素を追加で排出

一方、日本は石炭火力への依存度の高さが国内外から批判されている。グローバルな石炭需要を支え、多国籍企業によるこうした野放図な開発が儲かる原因は、日本のエネルギー政策にも求められるのではないだろうか。東日本大震災以降、日本の発電用電源の 9 割は火力発電となり、例えば 2017 年は石炭火力発電は全体の 32.7%を占めている(4)。そして、日本のエネルギー政策のかなりの部分をオーストラリアの資源に依っているところがあるのだ。日本の石炭輸入元一位がオーストラリアで、例として 2018 年では 61.3%をも占めている。また、オーストラリアの石炭輸出先一位も日本で例として 2018 年では 30.2%を占める(5)。

Adani の採掘プロジェクトが実を結べばその多くは日本への輸出に寄与するだろうと容易に想像がつく。逆に言えば、日本社会全体として石炭に NO を突きつける下からの運動を行うことはオーストラリアなど他国の石炭開発への抑止力となり、現地で活動する同胞への支援ともなるということだ。炭田と石炭火力は同時に対処すべきだろう。日本における石炭火力発電所反対運動と、StopAdani などの炭田建設反対の動きが結びつくことによって広がる可能性に大きく期待する。

結び

私たちが暮らしているシステムは、私たちと自然との関係を歪めている。また、それによってもたらされる気候変動の影響は、現に私たちの生活を脅かしている。

現状を改善するには、まずは、現状そして予想される変化を許すわけにはいかないという感覚を広く享有することが必要であると思う。そして、ライフスタイルの変革と、システムを変える運動の両面が重要になってくるだろう。運動を進めるきっかけは、お金ではなく、感受性や連帯感が鍵になってくるはずで、対話の取り組みを根気強く進めていく必要があると強く感じる。過日弊学における科学対話の講義でヒントを得たのだが、対話の取り組みにおいてキーとなる概念は、「vulnerability」ではないかと思う。日本語に翻訳するならば自分の弱さを認めるという意味を含んだ、変化に対する柔軟性だろうか。

あくまで例だが、ヴィーガンの人が肉食者のライフスタイルを責めたり、肉食者がヴィーガンやベジタリアンの人にハラスメントを及ぼしたりといった状況があるかもしれない。これを乗り越えるために、お互いを敵味方ではなく等身大の人間として認めて同じテーブルにつき、肉食者が「自分のライフスタイルは環境影響が大きかったんだ」と安心して認められるような雰囲気づくりが、スタートなのではないだろうか（ちなみに、私は肉食者です）。異なるライフスタイルや思想を持った人同士が、お互いを責め立てあうよりも、共通見識を構築し協働しあえる雰囲気が醸成されることを願うし、醸成過程において市民科学が果たす役割は大きいと思う。ここでの市民科学には、リビングサイエンスの要素と、科学批判的な要素の両方が含まれると考えている。

最後に、森林火災については現在その事後処理について政府や企業セクターで議論が進められていると思う。私は、オーストラリアの国立公園や自然保護区が、災害を契機として民間に切り売りされる可能性を危惧している。現に、公共資産の切り売りに繋がりがねない意見が Twitter で発せられている(6)。発したのはニューサウスウェールズ州の議員で訳すならば「ニューサウスウェールズ州には 870 もの国立公園や自然保護区（合計 700 万ヘクタール）があるのを知っていますか？いよいよそれらの指定を解除して、自然をうまく治めていくときですね」といったところか。今後は災害に便乗した新自由主義的な改革も警戒していく必要がある。オーストラリアに住む市民として、科学に関わる分野を専攻する学生として、森林火災に取り組む状況を多角的に調査し続けたい。

参考文献

- (1) オーストラリアの森林火災は、この地球の未来を“予言”している, Wired, 2020 年 1 月 7 日 9:00 JST
(<https://wired.jp/2020/01/07/australia-is-blazing-into-the-pyrocene-the-age-of-fire/>) 最終アクセス 2020 年 2 月 2 日
- (2) How to Stop Freaking Out and Tackle Climate Change, The New York Times, 2020 年 1 月 10 日
(<https://www.nytimes.com/2020/01/10/opinion/sunday/how-to-help-climate-change.html>) 最終アクセス 2020 年 2 月 3 日
- (3) Why we will #STOPADANI, #STOPADANI
(https://www.stopadani.com/why_stop_adani) 最終アクセス 2020 年 1 月 29 日, 訳は引用者による
- (4) 2019-日本が抱えているエネルギー問題(後編), 資源エネルギー庁, 2019 年 8 月 15 日
(https://www.enecho.meti.go.jp/about/special/johoteikyo/energyissue2019_2.html) 最終アクセス 2020 年 1 月 19 日
- (5) 世界の石炭事情調査 - 2018 年度中間報告 -, 石油天然ガス・金属鉱物資源機構, 2019 年 3 月 20 日
(<http://www.jogmec.go.jp/content/300361690.pdf>) 最終アクセス 2020 年 1 月 19 日
- (6) Mark Latham, @RealMarkLatham, 2020 年 1 月 6 日 9:25 AEDT
(<https://twitter.com/RealMarkLatham/status/1213949747725135872>) 最終アクセス 2020 年 2 月 3 日, 訳は引用者による